

P-17 医療者従事者の睡眠医学知識に関するシステムティックレビュー

○王 麗欽¹⁾, 奥野健太郎^{1,2)}, 和田 圭史¹⁾,
高橋 一也¹⁾

¹⁾ 大阪歯科大学 高齢者歯科学講座

²⁾ 大阪歯科大学附属病院 睡眠歯科センター

【目的】

睡眠障害は健康と社会に深刻な影響を及ぼす。医療従事者は睡眠医学の知識を学び、診断能力を向上させる必要がある。本研究では、睡眠医学の知識に関する論文についてシステムティックレビューを行い、異なる国や職業の特性による知識レベルの比較分析し、睡眠医学教育の改善に向けた具体的なフィードバックを提供し、睡眠医学の知識普及に貢献することを目的とする。

【方法】

本研究では、医療従事者を対象とした睡眠医学関連知識を問う研究を対象として網羅的検索を行った。研究の特徴、著者、年、送信されたアンケート数、および回答数、参加者の特徴、国、職業、睡眠医学の知識スコアを抽出した。研究の質の評価には「アンケートの回収率」を用いた。採用文献の中で共通するアンケートを用いた論文においては「正答率」の量的統合を行った。

【結果】

234編の文献選定を行い、77編の文献を採用した。採用論文の中で、共通するアンケートは4種類あり、「ASKME」が14本、「OSAKA」が23本、「OSAKA-KIDS」が6本、「Dartmouth」が4本であり、量的統合を行った。他のアンケートを使用した14本の研究は量的統合から除外した。アンケートの回答率は20%から100%の範囲。ASKMEでは、睡眠専門家が最も高い正答率を示し、口腔顔面外科研修医が最も低い正答率を示した。OSAKAでは、頭頸部外科レジデントが最も高い正答率を示し、学生が最も低い正答率を示した。OSAKA-KIDSでは、医学生と歯科学生が最も高い正答率を示した。Dartmouthでは、睡眠専門家が最も高い正答率を示し、学生が最も低い正答率を示した。

【考察】

睡眠医学に関する知識を問うアンケートの属性別正答率や各問題の難易度をシステムティックレビューによって明らかにすることができた。本結果が、各属性の睡眠医学教育へのフィードバックに役立つと考えている。

P-18 東京歯科大学市川総合病院における歯学部学生を対象とした睡眠歯科医学実習

○平賀 智豊¹⁾, 亀本 混樹²⁾, 有川 風雅¹⁾,
深田 美緒²⁾, 江澤 美穂¹⁾, 洲崎 裕子¹⁾,
小松 万純²⁾, 吉田 佳史²⁾, 松浦 信幸²⁾,
野村 武史¹⁾

¹⁾ 東京歯科大学口腔腫瘍外科学講座

²⁾ 東京歯科大学オーラルメディシン・病院歯科学講座

【目的】

閉塞性睡眠時無呼吸症（OSA）は、歯科医師が治療に関わる睡眠障害の一つであり、医科歯科連携においてOSAの疾患概念や治療法を理解することは歯科医師にとって重要である。近年の歯科医師国家試験のOSAに関する出題はより臨床的な内容が問われており、卒前教育において睡眠医学分野の知識の習得が求められている。

当院では、第5学年の臨床実習の一環として、OSA実習を実施している。今回、学生の睡眠に関する知識の修得度を把握し、実習の有用性を確認するため、学生に対して本実習に関するアンケート調査とテストを行ったので、その結果と実習の概要を示し、今後の課題について若干の考察を加えて報告する。

【方法】

2023年度市川総合病院での臨床実習における睡眠時無呼吸症実習に参加した本学歯学部第5学年125名に対して、実習開始前、終了後に実習の理解度に関する13項目の無記名自己記入式アンケートと全11問のテストを実施した。本研究は当院倫理委員会の承認（承認番号I17-39）を得て行った。

【結果】

睡眠ポリグラフ検査、経鼻的持続陽圧呼吸療法（nCPAP）、OSA危険因子、下顎前方位の採得についての理解度は講義前においても「よく知っている」「知っている」と回答した学生が半数以上を占めていた。下顎前方位の採得で使用する内視鏡検査の意義、治療評価方法、OA療法の副作用については、実習前には、約7割の学生が「あまり知らない」「知らない」と回答していたが、実習後には、9割以上の学生が「よく知っている」「知っている」と回答していた。実際の理解度を把握するためテストの平均正答数（11問中）を比較したところ、実習前では7.8問であったのに対し、実習後9.5問と有意に高い結果となった（ $p < 0.05$ ）。

【考察】

実際にnCPAPの装着、内視鏡検査や下顎前方位の採得を行うことにより、学生の理解度が向上することが示された。